

## 子どもの体力向上実践事業の成果とマネジメントの検討

### A Study on the Management and Effect of “Physical Fitness Improvement Project for Children”

前田佳奈<sup>1)</sup> 畑 攻<sup>2)</sup> 成瀬美紀<sup>1)</sup>  
池田延行<sup>3)</sup> 小野里真弓<sup>4)</sup>

*Kana MAEDA, Osamu HATA, Miki NARUSE  
Nobuyuki IKEDA and Mayumi ONOZATO*

#### Abstract

Today in Japan, Children's physical fitness decline is a serious problem. To solve the problem, a various projects were carried out by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology and Board of education etc. Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology started the “Physical fitness Improvement Project for Children” in April, 2004. And the project was finished in March, 2007. The purpose of this study was to clarify the effect and result of our project, which was intended to improve physical fitness of the elementary school students. The following management points were obtained:

1. The effect of the action of the object school became clear. “The making of that was the primary effect of the action health” was achieved, but “the making of as the second effect person”, “the making of as the third effect school” were not recognized too much.
2. The action result from a viewpoint of the management and a problem became clear. A cooperation system and the part which laid the foundation by the process of the management called the formation of the will of the child which laid the foundation of the action made it fragility whereas result as the final aim in the management was remarkable.
3. A factor to give to result of an effect and the management of the action became clear. It was the change of a quality and the business of the school administration by the change of the top and a change of the quantity.

That the public action such as the object school clarifies various effects as the numerical target is demanded. On the other hand, elucidation of the organization administration that realistic analysis and understanding of the organization administration are important, and linked result of the management will become important. In particular, the examination that is total of the result of the direct effect and management of the action that this study tried is more and more necessary

*keywords : Children, Physical fitness, Action, Management*

#### I. 研究の目的

近年の子どもの体力の低下やスポーツ活動の二極化などの問題は、毎年文部科学省から発表・報道されており、大きな社会問題となっている。子どもスポーツの阻害要因に関して畑 (2005)<sup>3)</sup>は、宇土の運動行動論 (1976)<sup>32)</sup>の視点から、運動への意欲やスポーツへの興味・関心といった主体的条件、運動の質や量、スポーツの広がりや深まりを示すスポーツの内容、さらに空間・仲間・時間に代表される物的環境・人的環境・社

会環境の要因を整理している。また、これらの要因を複合的に捉え、トータルに対応する必要性を強調している。

このような子どもの体力低下問題に対し、中央教育審議会答申 (2002)<sup>21)</sup>では「子どもの体力向上のための総合的な方策について」を取りまとめ、6つの方策を提案している。さらに平成16年度からは、「子どもの体力向上実践事業」を3ヵ年計画で実践し、平成19年3月に事業は終了し、現在は、各地域の対象校による取組みの総括の段階となっている。

本研究は、東京都内に所在する「子どもの体力向上実践事業」の指定校での3ヵ年計画の取組みを連携・支援する立場からのものである。対象校では、健康の

1) 日本女子体育大学 (助手)  
2) 日本女子体育大学 (教授)  
3) 国士舘大学 (教授)  
4) 上武大学 (講師)

大切さを子どもたちに伝えるために、学校と子どもを中心に、家庭や地域、公的教育機関などの関係諸機関が連携し、子どもをとり巻くスポーツ環境が豊かになることを目指している。この取組みでは、『体づくりは人づくり、学校づくり』をコンセプトにした「都市型連携システム」の構築も重要なテーマとなっている。

このような取組みは、対象校の掲げる一次的効果や波及効果をきちんと評価することの重要性とともに、並行して様々な連携の成果や、運営上の諸問題を分析し、総合的なマネジメントの実践レベルでの考察が重要であるものとする。

そこで本研究は、新体力テストなど各種調査結果から、「子どもの体力向上実践事業」の対象校で行われた取組みの最終的な成果とその要因を明らかにし、取組みに連動したマネジメントの要因を明確にするとともに、今後のマネジメントの在り方を考察・検討することを目的とした。

## II. 研究の方法

### 1. 基本的なアプローチ

対象校で取組みを進めるにあたり、事業の初年度である平成16年度は、組織・体制づくりを中心に、平成17年度にプログラムの実践を進め、最終年度である平成18年度は前年度のプログラム実践の継続および変更が行われた。この取組みの成果を検討するために、3年間の間に新体力テストと2種類のアンケート調査を実施し、得られた結果を対象校の視点とマネジメントの視点の2点から考察をした。

### 2. 調査項目の設定

本研究で用いた調査は、新体力テストと独自の2種類のアンケート調査である。調査内容は生活実態調査(調査A)とスポーツ活動調査(調査B-1, B-2)の2種類である。

生活実態調査は、文部科学省が「子どもの体力向上実践事業」の全国指定校で実施したものであり、体力の向上に直接的・間接的に関連する4つの要因から設定されている。具体的には食事や睡眠からなる「生活習慣」8項目、活動時間や運動機会からなる「運動習慣」6項目、内発的意欲や運動欲求からなる「意欲」6項目、保護者の支援や保護者の考えからなる「保護者」7項目から設定されている。

スポーツ活動調査は佐伯ら(1998)<sup>29)</sup>によって定義付

けられたマルチスポーツ概念を基に、福本(2000)<sup>2)</sup>や久野(2006)<sup>9)</sup>によって具体化され、実績のあるマルチスポーツに関する13項目、保護者の子どもとの関り方に関する15項目を中心にスポーツ活動状況、スポーツ環境の項目から設定した。

### 3. 調査の実施および分析方法

本研究の対象校は、研究モデル校として実績のある小学校である。対象校は、東京都区内の閑静な住宅街に所在する全校生徒約250名・10クラスと小規模な学校ではあるが、「子どもの体力向上実践事業」の他に区教育委員会の「心と体の健康教育」の研究指定校でもあり、先進的な取組みを展開している教育モデル校である。本研究は、3カ年の取組み期間中のデータを用いて考察した。

表1は、調査対象および調査実施期間を示している。これらの分析のうち、調査Aは文部科学省の方法による「生活習慣」、「運動習慣」、「意欲」、「保護者」の4つの要因を数値化したフィッシュボーン分析を実施した。フィッシュボーン分析とは、全国の「子どもの体力向上実践事業」の指定校で実施した調査を分析したものであり、それぞれの取組みを多角的・構造的に分析し、取組みの的確な診断を可能にする目的で新たに開発されたものである。具体的に、体力の向上に直接

表1 調査対象および期間

	対象者	期 間
新体力テスト	全校生徒	1回目 2004年6月 2回目 2005年6月 3回目 2006年6月
調査A	全校生徒	1回目 2004年10月中旬 2回目 2005年9月中旬 3回目 2006年9月中旬
調査B-1	5・6年児童	2005年10月中旬～11月上旬 対象101名 回収 93名 (92.1%)
		2006年11月中旬～12月上旬 対象 98名 回収 97名 (99.0%)
調査B-2	5・6年児童 の保護者	2005年10月中旬～11月上旬 対象101名 回収 76名 (75.2%)
		2006年11月中旬～12月上旬 対象 98名 回収 73名 (74.5%)

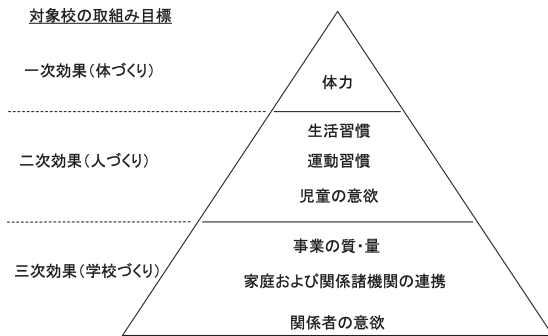


図1 対象校の取組み目標と分析項目

的・間接的に関連する要因を数値化したものであり、平成16年度の全国平均値を50とした偏差値をそれぞれ算出・比較し、平成16年度から平成17年度および平成17年度から平成18年度における数値の変動を分析したものである。

調査Bで収集されたデータは、マルチスポーツ項目、保護者の関わり方の項目を中心に年度比較を行い、必要に応じて $\chi^2$ 検定を用いた。

なお、図1は対象校の取組み目標と分析項目であり、対象校の状況に合わせた本研究での分析の構造を示している。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 一次効果(体づくり)の結果

対象校では取組みの一次効果として体力の向上という「体づくり」を期待している。表2は、対象校の3年間の新体力テストの結果を平成16年度の全国平均と比較したものである、太字は対象校が上回った項目を、網掛けは対象校が有意に上回った項目を示している。

なお、H17年度の全国平均と対象校の比較も必要ではあるが、H18年度の平均値が発表されておらず、全ての年度で全国平均と比較するのは困難である。また、比較対象となる基準値が複数となると比較が容易でないため、事業の初年度であるH16年度の全国平均値をひとつの基準値として比較を行った。

体力測定9項目6学年で男女合わせると毎年108項目ある。このうち全国平均を上回った項目は、平成16年度は43項目、平成17年度は59項目、平成18年度は66項目である。さらに全国平均を有意に上回った項目は、平成16年度は14項目、平成17年度は21項目、平成18年度は15項目である。

種目によって差はあるものの、全体的に、平成16年

度よりも平成17年度・18年度のほうが全国平均を上回る結果を示しており、この取組みの3年間の一次的な効果としての体づくりが良好であることが明らかである。

#### 2. 二次効果(人づくり)の結果

##### 2-1. フィッシュボーン分析結果

対象校では取組みの二次効果として生活習慣や意欲の改善という「人づくり」を期待している。表3は、文部科学省<sup>24)25)</sup>によって分析・報告されている、体力の向上に直接的・間接的に関連する「生活習慣」「運動習慣」「意欲」「保護者」の4項目から分析したフィッシュボーン分析の結果を表にまとめたものである。平成16年度から平成17年度の変化は平成16年度の全国指定校の平均値を基準とし、平成17年度から平成18年度の変化は平成17年度の平均値を基準とし、各年度の偏差値を求め比較した。太字は前年度より0.5ポイント以上、網掛けは前年度より1ポイント以上改善された項目を示している。

##### (1) 生活習慣

平成16年度から17年度にかけて男子は、「夜食」「給食」や「朝食」といった食事の項目で1ポイント以上の大幅な改善がみられ、睡眠・メディアの項目では改善がみられなかった。平成17年度から18年度にかけては「夜食」は1ポイント以上、「おやつ」と「朝食」では0.5ポイント以上のさらなる改善がみられ、前年度にはみられなかったメディアの項目のひとつである「パソコン・TVゲーム」で1ポイント以上の改善がみられた。

女子は平成16年度から17年度にかけては男子と同様に、「夜食」「給食」「朝食」の3項目で1ポイント以上の大幅な改善がみられた。平成17年度から18年度にかけては「夜食」「おやつ」は1ポイント以上、「夕食」では0.5ポイント以上のさらなる改善がみられ、「給食」「朝食」では衰退がみられた。

項目によって変動に差はあるものの、男女とも全体的に生活習慣は平成16年度よりも改善されていることが明らかである。

##### (2) 運動習慣

平成16年度から17年度にかけて男子は「放課後」「時間」の2項目で1ポイント以上の大幅な改善がみられた。平成17年度から18年度にかけては「仲間」「場所」の2項目で1ポイント以上の改善がみられたが、「放課後」「学校」で衰退がみられた。

表2 対象校の新体力テスト結果—年度比較—

	1年生		2年生		3年生		4年生		5年生		6年生		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
握力 (kg)	H16	6.90±1.37	6.46±1.06	11.83±2.96	10.36±1.86	12.35±2.01	11.25±2.86	13.35±2.95	11.67±3.00	18.95±4.24	17.88±3.06	20.58±3.02	18.38±3.80
	H17	9.64±2.21	8.09±1.78	9.31±1.76	7.96±1.87	12.11±3.34	10.5±1.80	14.05±2.52	12.78±3.62	16.10±3.65	15.60±3.43	22.12±5.05	19.69±4.55
	H18	9.11±1.74	8.94±1.51	10.96±2.41	9.65±2.10	12.47±2.55	10.54±1.76	14.44±3.79	12.69±1.59	16.47±3.03	15.81±4.33	19.48±4.43	17.96±4.24
	全国	9.59±2.56	8.77±2.28	11.23±2.77	10.44±2.64	13.14±2.82	12.26±2.70	15.04±3.24	14.07±3.06	17.46±3.82	16.96±3.79	20.31±4.45	19.57±4.20
上体起こし (回)	H16	8.80±5.22	6.65±5.87	14.41±4.75	12.00±3.64	13.70±4.22	12.95±3.66	17.17±4.39	14.37±6.95	22.57±4.65	19.56±4.29	23.85±5.97	18.71±5.72
	H17	10.86±5.03	8.86±6.64	13.81±4.25	10.24±5.31	15.95±5.94	16.42±6.41	17.75±3.77	16.26±4.13	19.27±4.13	17.30±4.15	24.88±3.25	23.00±3.44
	H18	12.84±4.91	11.89±4.63	13.27±4.17	9.60±7.67	15.82±5.50	10.71±6.41	19.61±6.99	19.00±6.00	18.67±3.94	16.48±4.23	22.00±4.47	20.00±5.25
	全国	10.53±5.21	10.38±4.89	12.92±5.36	12.48±5.17	15.14±5.60	14.17±5.13	17.05±5.55	15.68±5.24	19.36±6.01	17.53±5.42	21.00±5.33	18.29±4.97
長座体前屈 (cm)	H16	23.90±5.78	28.71±4.49	28.91±7.08	32.07±4.87	25.35±4.98	28.05±6.28	31.20±7.35	34.57±5.57	36.53±8.04	38.80±7.38	37.57±10.80	
	H17	25.95±5.52	26.82±4.25	22.00±4.54	26.68±4.91	30.00±8.64	31.75±6.58	28.00±4.95	32.35±7.73	32.20±7.64	37.27±7.20	45.20±8.34	47.19±8.23
	H18	25.53±4.96	25.94±3.61	33.19±7.54	35.35±7.34	25.82±5.47	33.25±6.70	28.89±6.86	34.77±5.79	33.22±5.15	39.00±8.97	36.77±7.42	42.04±8.02
	全国	25.59±6.78	27.24±6.35	27.18±7.07	29.63±7.01	29.85±7.18	31.63±7.08	31.00±7.00	33.90±7.02	33.21±8.81	36.56±8.68	35.06±8.05	38.66±8.21
反復横跳び (点)	H16	—	—	31.50±5.54	29.14±3.42	31.95±4.43	31.30±4.13	35.55±5.16	32.72±4.50	44.09±6.93	44.80±4.49	46.05±6.56	37.23±10.89
	H17	29.95±4.69	28.36±4.23	30.75±3.03	28.24±6.22	35.89±9.90	38.25±3.27	39.40±4.67	35.65±7.94	45.32±5.96	40.43±6.14	50.08±4.86	45.69±4.33
	H18	28.26±5.49	27.67±3.02	33.76±5.03	29.10±6.60	36.35±6.31	32.96±7.81	40.28±10.82	39.15±7.13	43.75±6.81	40.05±6.32	47.80±5.49	43.57±6.57
	全国	26.04±4.83	25.63±4.07	30.00±5.48	28.85±4.93	34.37±6.57	32.33±5.98	38.01±6.97	35.84±6.31	41.70±6.99	39.42±6.34	44.86±6.61	41.21±6.13
20m シャトルラン (回)	H16	15.40±7.00	11.71±4.67	29.27±13.25	16.00±5.64	30.70±15.70	21.76±9.57	35.39±17.76	22.67±10.99	44.24±13.74	36.80±14.73	47.10±22.03	41.93±17.07
	H17	12.32±3.87	9.77±3.75	17.06±8.24	9.68±3.32	29.21±17.07	22.00±11.36	40.44±21.86	36.38±16.38	52.25±19.15	37.95±12.98	59.32±25.65	41.39±17.24
	H18	15.68±8.08	13.61±3.53	32.08±12.16	19.25±8.50	39.19±15.89	22.50±11.36	40.44±21.86	42.06±18.19	33.42±13.90	49.38±20.05	39.23±15.53	59.30±21.40
	全国	15.92±8.19	13.54±5.66	24.18±12.25	19.70±8.43	33.27±15.75	26.45±12.22	42.06±18.19	33.42±13.90	49.38±20.05	39.23±15.53	59.30±21.40	45.15±16.74
50m走 (秒)	H16	11.57±0.72	12.30±1.65	10.60±0.68	11.01±0.47	10.47±1.02	11.01±1.18	9.81±0.82	10.36±0.85	8.94±0.61	9.42±0.52	9.02±0.55	9.26±0.69
	H17	12.00±0.87	12.70±1.16	10.45±1.17	11.08±1.03	10.04±0.68	10.14±0.53	9.52±0.51	10.11±0.83	8.46±0.73	9.07±1.11	8.74±0.71	8.95±0.50
	H18	12.21±1.22	12.59±1.24	10.68±0.66	11.79±1.02	9.95±0.67	10.63±0.82	9.68±0.67	9.87±0.68	9.27±0.62	9.69±0.66	8.77±0.72	9.15±0.79
	全国	11.60±1.01	11.90±0.98	10.76±0.92	11.01±0.85	10.15±0.82	10.44±0.80	9.69±0.90	9.93±0.78	9.33±0.78	9.54±0.71	8.89±0.78	9.22±0.68
立ち幅跳び (cm)	H16	131.00±15.19	112.83±10.81	134.23±18.64	114.71±15.77	133.90±15.47	122.95±19.86	152.97±16.76	131.00±20.59	163.55±19.61	155.19±17.82	178.10±15.16	155.43±31.27
	H17	129.95±15.48	106.73±18.83	138.38±14.69	114.52±16.82	146.39±18.72	135.83±14.22	155.35±14.03	136.30±21.31	163.45±16.37	144.37±22.27	182.24±19.38	169.75±16.04
	H18	121.00±18.71	118.89±12.66	138.81±21.13	118.35±20.85	149.18±10.99	132.83±16.83	151.61±29.83	149.92±15.07	171.33±14.64	147.19±18.70	173.06±18.91	158.43±24.53
	全国	113.54±16.94	104.47±15.77	125.83±18.35	116.37±16.97	138.61±18.07	128.14±18.09	146.24±18.83	137.57±18.77	155.52±19.60	146.26±19.71	167.24±21.49	154.82±19.90
ソフトボール 投げ (m)	H16	9.20±3.58	6.23±1.38	14.78±5.93	7.57±3.32	17.65±5.86	9.43±3.19	20.84±7.31	8.61±1.93	24.86±8.13	15.25±5.90	29.15±10.14	18.14±6.04
	H17	9.50±3.63	5.27±2.49	13.06±3.34	7.32±2.42	19.68±7.91	9.67±5.72	23.10±7.76	12.78±5.70	25.10±8.13	12.27±3.52	30.32±8.70	18.63±8.10
	H18	9.53±4.45	5.67±1.37	13.12±4.94	7.30±2.67	20.00±5.03	9.67±4.62	24.56±7.88	12.15±5.91	27.17±7.88	14.19±5.47	28.03±10.67	12.82±4.15
	全国	9.37±3.31	5.85±1.96	12.89±4.61	7.81±2.57	17.42±5.97	9.85±3.00	21.65±7.04	12.43±3.80	25.62±7.80	15.04±4.93	30.19±9.09	17.15±5.67
得点合計 (点)	H16	26.00±6.09	24.90±5.19	39.86±7.71	35.85±5.90	40.15±5.65	39.16±10.61	45.90±7.27	42.30±8.26	60.00±7.71	59.64±8.15	62.53±8.85	58.00±13.06
	H17	31.27±7.21	26.64±7.96	35.27±5.36	31.83±4.82	46.22±9.05	45.42±4.89	49.75±6.53	47.17±10.03	57.70±7.58	54.80±9.75	68.00±8.37	67.79±6.15
	H18	30.67±7.41	30.61±4.46	40.60±6.82	35.45±6.59	46.19±5.93	42.96±7.82	52.65±9.00	52.46±9.48	56.88±7.11	55.00±10.95	62.62±8.21	60.34±9.95
	全国	29.67±5.99	29.14±5.92	36.53±6.61	36.56±6.50	43.67±7.07	41.06±7.12	49.11±7.95	49.01±7.81	55.10±8.37	55.40±8.03	61.03±8.54	60.14±7.98

\* 太字は対象校が全国平均値を上回った項目を示している  
\* アミカけは対象校が全国平均を有意に上回った項目を示している  
\* H16年度1年生の反復横跳びは欠損値

表3 フィッシュボーン分析結果

			男子		女子	
			H16→H17	H17→H18	H16→H17	H17→H18
生活習慣	食事	夜食	2.83	1.76	2.70	1.48
		夕食	-2.58	-0.43	-2.08	0.92
		おやつ	-0.91	0.74	0.06	1.05
		給食	3.06	0.18	1.45	-0.77
		朝食	3.46	0.60	1.93	-0.64
	睡眠・メディア	パソコン・TVゲーム	-4.96	1.55	-2.39	0.25
		テレビビデオ	-0.63	0.39	0.04	-0.92
睡眠時間		0.19	-1.32	-1.96	-1.57	
運動習慣	活動時間	スポーツ	0.08	0.68	-0.36	-0.85
		放課後	1.01	-1.32	-3.86	-2.22
		学校	-0.02	-0.46	0.03	-0.23
	運動機会	仲間	0.18	2.27	0.01	0.31
		場所	-0.11	1.10	-2.93	-0.88
		時間	1.02	0.36	-2.40	-1.39
意欲	内発的意欲	内発的意欲	1.53	0.80	2.90	1.69
	運動欲求	運動欲求	1.35	-0.71	2.21	0.24
	心の健康	身体的訴え	-0.73	-0.78	-1.39	-2.40
		行動(感情)	1.19	0.40	1.49	-1.50
		不安傾向	-0.41	-0.38	0.65	-1.02
		自己効力感	-1.31	-0.67	-0.28	-0.87
保護者	子どもの生活の様子	運動機会	0.00	0.94	-2.20	-2.33
		自立	2.23	1.04	0.87	-0.08
	保護者の支援	支援	-0.09	-0.56	-0.42	-1.11
		一緒にする支援	-0.47	-0.04	-1.18	-1.94
	保護者の考え	体力意識	1.29	0.98	0.38	1.02
		健康意識	0.65	2.64	-1.55	0.74
		運動意識	-0.67	-0.29	-1.45	-0.75

※年度間の変化を比較するため、全指定地域の平均値を基準とした偏差値を求め、各年度の偏差値の差を表示。H16年度からH17年度の変化はH16年度の平均値を基準に、H17年度からH18年度の変化はH17年度の平均値を基準とした。

※偏差値の差がプラスのものについて、0.5ポイント以上のものを太字、1ポイント以上のものを網掛けした。

女子は平成16年度から17年度にかけて改善している項目はなく、平成17年度から18年度にかけても改善はみられなかった。

運動習慣に関して、男子は学校での活動で改善が必要であり、女子は早急な改善が必要な状況である。

### (3) 意欲

平成16年度から17年度にかけて男子は「内発的意欲」「運動欲求」「行動(感情)」において1ポイント以上の大幅な改善がみられた。平成17年度から18年度にかけては「内発的意欲」で0.5ポイント以上とさらなる改善



がみられたが、他の項目は低下傾向である。

女子も男子と同様に平成16年度から17年度にかけて「内発的意欲」「運動欲求」「行動（向上）」で1ポイント以上の改善がみられ、「不安傾向」は0.5ポイント以上の改善がみられたが、平成17年度から18年度にかけては「内発的意欲」のみ1ポイント以上の向上がみられ、その他の項目は維持、あるいは低下傾向にある。結果1で男子も女子も体力は向上していることが明らかにされたが、意欲は低下傾向を示している。この現象については体力テストの練習や運動の必修化などにより、結果はよくなったものの、運動することが嫌になってしまったという考え方と、昨年度の意欲の伸び率がもともと高く、それ以上伸びる余地がなかったという二通りの考え方があり、しかし、運動習慣の項目も低値を示すことから、フィッシュボーン要因の総合的な向上ではなく、一面的な体力向上のみが顕著であったものと考えられる。

## 2-2. マルチスポーツ分析結果

表4・5は、子どもたちが現在および今後、どのようにスポーツと関わっているのかを示したものである。

表4は、平成17年度の現在および今後のマルチスポーツ状況を示している。まず、マルチスポーツ13項目のうち、現在の関わり方は13項目中3項目で50%を

超え、今後の関わり方は7項目で50%を超えている。また、13項目中11項目で現在よりも今後のほうが高い結果を示しており、スポーツに対する意欲が高いことが伺える。特に「たくさんの種類のスポーツを楽しむ」「季節に合わせてスポーツを楽しむ」など「するスポーツ」に関する項目が有意に高く、「スポーツ番組をよくみる」の「みるスポーツ」が有意に低いことから、今後はスポーツをみるだけでなく、実際にスポーツを楽しみたいという希望があると言える。

表5は、現在のマルチスポーツ状況を年度比較した結果を示している。50%を超える項目が平成17年度では3項目なのに対し、平成18年度は0項目と低下傾向が伺える。そのようななかで「運動部やクラブに入り選手としてスポーツをする」や「運動やスポーツをよくする」など6項目で有意な低下がみられた。このことから平成17年度はスポーツに対する意欲があったにも関わらず、実際の行動としてはスポーツ活動が減少していることが伺える。

二次効果としての人づくりの評価は、結果2-1のフィッシュボーン分析や結果2-2のマルチスポーツ分析より、子ども達のスポーツに対する意欲に停滞・低下が現れていることが明らかとなり、望ましい結果とは言えないものであった。

表4 平成17年度マルチスポーツ状況

5・6年生 (N=93)		現在		今後		$\chi^2$ 検定		
		n	%	n	%	$\chi^2$	DF	P
1	運動部やクラブに入り選手としてスポーツをする	33	35.5	43	46.2	4.44976	1	*
2	たくさんの種類のスポーツを楽しむ	31	33.3	57	61.3	16.7366	1	***
3	季節に合わせてスポーツを楽しむ	24	25.8	48	51.6	15.3187	1	***
4	運動やスポーツをよくする	57	61.3	55	59.1	2.33398	1	n.s.
5	自分の気分や考えを生かしてスポーツを楽しむ	30	32.3	41	44.1	5.03441	1	*
6	家族や友達とスポーツの話をよくする	43	46.2	39	41.9	2.53002	1	n.s.
7	よくスポーツ観戦をする	32	34.4	40	43.0	3.71637	1	n.s.
8	スポーツ番組をよくみる	50	53.8	35	37.6	7.04135	1	**
9	自分の体力や能力にあわせてスポーツを楽しむ	44	47.3	50	53.8	2.92507	1	n.s.
10	いろいろなレベルの人とスポーツを楽しむ	43	46.2	50	53.8	3.2043	1	n.s.
11	忙しくても時間をみつけてスポーツを楽しむ	35	37.6	49	52.7	6.42577	1	*
12	手軽にスポーツを楽しむ	48	51.6	52	55.9	2.50884	1	n.s.
13	お友達にスポーツを教えることがある	30	32.3	39	41.9	4.1702	1	*

複数回答 \*\*\* P<0.001, \*\* P<0.01, \* P<0.05

表5 マルチスポーツ状況の年度比較

現 在		H17		H18		有意差		
		N=93		N=97		$\chi^2$ 検定		
		n	%	n	%	$\chi^2$	DF	P
1	運動部やクラブに入り選手としてスポーツをする	33	35.5%	21	21.6%	6.99329	1	**
2	たくさんの種類のスポーツを楽しむ	31	33.3%	25	25.8%	3.80716	1	*
3	季節に合わせてスポーツを楽しむ	24	25.8%	19	19.6%	4.01493	1	*
4	運動やスポーツをよくする	57	61.3%	41	42.3%	8.99227	1	**
5	自分の気分や考えを生かしてスポーツを楽しむ	30	32.3%	25	25.8%	3.50287	1	n.s.
6	家族や友達とスポーツの話をよくする	43	46.2%	37	38.1%	3.42446	1	n.s.
7	よくスポーツ観戦をする	32	34.4%	40	41.2%	3.19281	1	n.s.
8	スポーツ番組をよくみる	50	53.8%	45	46.4%	3.13823	1	n.s.
9	自分の体力や能力にあわせてスポーツを楽しむ	44	47.3%	42	43.3%	2.43063	1	n.s.
10	いろいろなレベルの人とスポーツを楽しむ	43	46.2%	41	42.3%	2.43406	1	n.s.
11	忙しくても時間を見つけてスポーツを楽しむ	35	37.6%	26	26.8%	4.93304	1	*
12	手軽にスポーツを楽しむ	48	51.6%	43	44.3%	3.11649	1	n.s.
13	お友達にスポーツを教えることがある	30	32.3%	23	23.7%	3.93162	1	*

複数回答 \*\*\* P<0.001, \*\* P<0.01, \* P<0.05

### 3. 三次効果（学校づくり）の結果

#### 3-1. 保護者（フィッシュボーン分析結果より）

表3の保護者の項目から、男子は平成16年度から17年度にかけて「自立」「体力意識」が1ポイント以上と大幅に改善し、平成17年度から18年度は「自立」「健康意識」が1ポイント以上とさらに改善したことを示している。女子は平成16年度から17年度にかけて「自立」が0.5ポイント以上と改善し、平成17年度から18年度は「体力意識」が1ポイント以上と大幅に改善している。しかし、男女とも「支援」「一緒にする支援」に関しては低下を示しており、保護者のスポーツに対する直接的な支援が十分に得られていないことが明らかである。

#### 3-2. 保護者の関わり

表6・7は、保護者が子どもに対して現在および今後どのように関わっているのかについての分析結果を示したものである。

表6は、平成17年度の保護者の子どもとの関わり状況を示している。まず、保護者の関わり方15項目のうち、現在の関わり方は15項目中8項目で50%を超え、今後の関わり方は6項目で50%を超えている。また、15項目中10項目で現在よりも今後のほうが低い結果を示しており、保護者は今後子どもにあまり過干渉にな

らないようにしようと考えていることが伺える。しかし、その中でもスポーツに関する項目は今後のほうが有意に高く、子どもと一緒にスポーツを楽しみたいというニーズが高いことが明らかである。

表7は、現在の保護者の関わりを年度比較した結果を示している。50%を超える項目が平成17年度、平成18年度共に8項目と現状維持の状況が伺える。そのようななかで平成18年度は「子どもの食事に気をつける」「子どもに規則正しい生活をさせている」といった生活に関する項目が有意に高く、「子どもに運動・スポーツの指導をする」といったスポーツの関わりは有意に低い結果であった。このことから、保護者は子どもとスポーツを楽しみたいという意向が強いにも関わらず、実際に行動に移した者は少なく、保護者も子どももスポーツ活動の時間が減少していることが推測される。

#### 3-3. 対象校のプログラム・事業の変化

対象校では、大きく3種類のプログラムが実施された。表8は、平成17年度および平成18年度に行われたプログラム・事業をまとめたものである。

運動の習慣化を目的に行われた日常的なプログラムは、始業前や朝会を利用したふれあいタイムや体育朝会、ストレッチタイムが行われた。日常的なプログラムに関しては、平成18年度も引き続き実施された。

表6 平成17年度保護者の関わり方

平成17年度 保護者 (N=76)		現在		今後		$\chi^2$ 検定		
		n	%	n	%	$\chi^2$	DF	P
1	複数のスポーツを子どもと楽しむ	13	17.1	32	42.1	14.5529	1	***
2	子どもと学校でのことについてよく話す	60	78.9	44	57.9	10.8397	1	**
3	子どもの運動会などスポーツイベントの応援によく行く	55	72.4	37	48.7	11.6754	1	**
4	子どもとスポーツのことについてよく話をする	39	51.3	35	46.1	3.05475	1	n.s.
5	子どもの食事に気をつけている	59	77.6	48	63.2	6.97653	1	**
6	子どもに運動・スポーツの指導をする	19	25.0	22	28.9	3.64052	1	n.s.
7	子どもに規則正しい生活をさせている	51	67.1	49	64.5	3.04	1	n.s.
8	社会の出来事や事件などを子どもとよく話す	52	68.4	44	57.9	4.6369	1	*
9	シーズンに合わせて子どもとスポーツを楽しむ	21	27.6	27	35.5	4.14103	1	*
10	子どもの勉強や宿題の面倒をよくみる	37	48.7	28	36.8	4.86508	1	*
11	子どもと友達とのことについてよく話す	53	69.7	43	56.6	5.65476	1	*
12	子どものスポーツに関して相談できる人がいる	20	26.3	18	23.7	3.64912	1	n.s.
13	子どもと将来の夢などについてよく話し合う	33	43.4	40	52.6	3.92717	1	*
14	私は学校の活動によく協力する	38	50.0	31	40.8	3.9546	1	*
15	私は地域でのボランティアなどの活動によく参加する	10	13.2	19	25.0	7.71292	1	**

複数回答 \*\*\* P<0.001, \*\* P<0.01, \* P<0.05

表7 保護者の関わり方の年度比較

現 在		H17		H18		有意差		
		N=76		N=73		$\chi^2$ 検定		
		n	%	n	%	$\chi^2$	DF	P
1	複数のスポーツを子どもと楽しむ	13	17.1	11	15.1	5.10356	1	*
2	子どもと学校でのことについてよく話す	60	78.9	56	76.7	3.98729	1	*
3	子どもの運動会などスポーツイベントの応援によく行く	55	72.4	59	80.8	5.26661	1	*
4	子どもとスポーツのことについてよく話をする	39	51.3	41	56.2	3.05533	1	n.s.
5	子どもの食事に気をつけている	59	77.6	62	84.9	5.75999	1	*
6	子どもに運動・スポーツの指導をする	19	25.0	11	15.1	6.53358	1	*
7	子どもに規則正しい生活をさせている	51	67.1	56	76.7	5.0563	1	*
8	社会の出来事や事件などを子どもとよく話す	52	68.4	60	82.2	7.45462	1	**
9	シーズンに合わせて子どもとスポーツを楽しむ	21	27.6	14	19.2	5.26661	1	*
10	子どもの勉強や宿題の面倒をよくみる	37	48.7	29	39.7	3.9404	1	*
11	子どもと友達とのことについてよく話す	53	69.7	59	80.8	6.10841	1	*
12	子どものスポーツに関して相談できる人がいる	20	26.3	19	26.0	3.47764	1	n.s.
13	子どもと将来の夢などについてよく話し合う	33	43.4	35	47.9	3.01024	1	n.s.
14	私は学校の活動によく協力する	38	50.0	38	52.1	2.74999	1	n.s.
15	私は地域でのボランティアなどの活動によく参加する	10	13.2	17	23.3	7.01269	1	**

複数回答 \*\* P<0.01, \* P<0.05



表8 対象校のプログラム・事業の変化

	プログラム名	H17年度	H18年度
日常的なプログラム	ふれあいタイム	週2回, 始業前, 運動遊び	週2回, 始業前, 運動遊び
	体育朝会	月3回, マラソン・大縄等	月3回, マラソン・大縄等
	ストレッチタイム	毎日, 始業前, 終業後	毎日, 始業前, 終業後
親子プログラム	土曜スポーツひろば	月2回, ミニバレーボール	月1回
	ドレミPal	年3回	年3回
	親子交流スポーツ	学校公開日	
特別プログラム	家庭教育学級	年3回, 講義	
	かけっこ教室	運動会前	
	水泳指導	夏期休業期間	夏期休業期間

次に、親子で一緒にスポーツを楽しむことを目的としたプログラムは、主に土曜に開催され、ミニバレーボールやニュースポーツが実施された。しかし、平成18年度には回数の減少がみられ、学校公開日に実施されていた親子交流スポーツに関しては、平成18年度は実施されなかった。

最後に、体育大学との連携によって行われた特別プログラムでは、保護者への体や栄養に関する家庭教育学級が開催された。また子ども達には運動会直前に陸上部員によるかけっこの指導や夏期休業中の水泳指導が行われた。しかし、平成18年度に開催された特別プログラムは水泳指導のみであった。

親子プログラムや特別プログラムでみられた、回数の減少やプログラムそのものの消滅から、実践プログラムの質・量の低下が読み取れる。特に、体育大学との連携活動は極端に減ってしまい、連携の弱体化の現われと言える。

三次効果としての学校づくりの評価は、結果3-1、3-2のように関係者である保護者のスポーツに対する意欲の低下や、結果3-3のプログラム・事業の衰退で示したように、取組みの基盤である連携の弱体化がみられ、ここでの「学校づくり」は最終的にはあまり効果とならなかったことを示している。

#### 4. 取組みの効果と運営の成果

学校現場において、本来、教員は子どもに対する指導・実践のみではなく、学校現場のマネジメントも行わなければならない。そこで、対象校の立場からの考察に加え、現実的なマネジメントの視点からの考察も必要である。図2は、本取組みが期待した、本来の効果と、その取組みをサポートするマネジメントのプロ

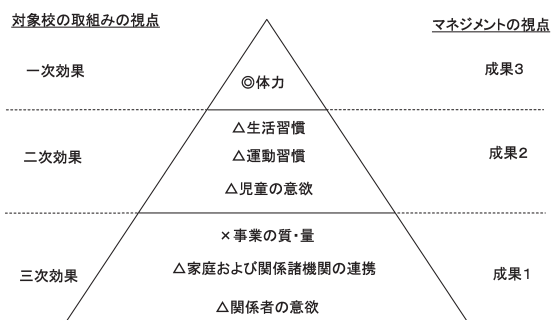


図2 取組みの効果とマネジメントの成果

セスの関係を示したものである。

まず、結果1の新体力テストの結果から、対象校の取組みは一次から三次の効果の中で最も具体的な「体力の向上」が顕著であった。しかし、マネジメントのプロセスは、図の右側のように、まずは体制づくりとしてのベースを固め、順次成果を積み上げていくという構造的なアプローチこそがマネジメントの手順であると考えられる。

まず、マネジメントの成果1を示す「関係者の意欲、家庭および関係諸機関の連携」は、結果3-1、3-2の保護者の関わりから生活面に関しては関わっているものの、スポーツに対しては意欲がみられないことや、結果3-3のプログラム・事業の質・量の低下から連携の弱体化を示す結果であった。次に、マネジメントの成果2に位置づく「児童の意欲」は、結果2-1(3)のフィッシュボーン分析から意欲の停滞・低下がみられたことや、結果2-2のマルチスポーツ分析によりスポーツに対する意欲が低下していることから、この部分の成果は十分ではないことが明らかにされた。このことから成果1、成果2のピラミッドのペー

スにあたる部分が最終年度に弱体化してしまったことを示している。すなわち、マネジメントのプロセスが崩壊し、体力の向上という結果のみが残ってしまったこととなる。

この原因として、学校現場でのマネジメントが軽視、もしくは重要性が認識されていなかったものと考えられる。よって、結果として指導のみ行えばよい、すなわち、体力の向上という結果を残せばよいという考えが現場にあったと言える。それは、最終年度でのトップとしての学校長の交代が大きな要因の一つとして考えられる。組織とは「一定の共通目標を達成するために、成員間の役割や機能が分化・統合されている集団」のことであり、組織はそのトップの方針によって変化しやすいものである。

対象校の前任の校長は体育の専門家であり、連携活動にも意欲的であった。しかし、後任は数学の専門家で学力重視の傾向が強く、指定年度内であっても学校運営に変化が現れた結果、関係諸機関との連携を重視しなかった結果の表れであると考ええる。

#### IV. 結 論

本研究では、子どもの体力向上実践事業の取組みの最終的な効果を検証するとともに、効果につながる要因を分析・考察した。また、この取組みでの運営に関わる要因と効果の相互の関連から、マネジメントの視点から考察を加えた。結果は以下のように要約される。

- (1) 対象校の取組みの効果が明らかとなった。取組みの一次効果である「体づくり」は達成されたが、二次効果としての「人づくり」、三次効果としての「学校づくり」は、あまり認められなかった。
- (2) マネジメントの視点からの取組み成果と課題が明らかとなった。それは、マネジメント上の最終目標としての成果が顕著であるのに対して、取組みの土台となる連携システムや子どもの意欲の形成というマネジメントのプロセスでの、土台となる部分が脆弱化していた。
- (3) 取組みの効果やマネジメントの成果に及ばす要因が明らかとなった。その要因のひとつとは、トップの交代による学校運営の変化と事業の質と量の変化であった。

対象校のような公的な取組みは、数値目標としての様々な効果を明らかにすることが求められる。その一方で、組織運営の現実的な分析と理解が重要であり、

マネジメントの成果と連動した、組織運営の解明が重要となろう。特に本研究が試みたような取組みの直接の効果と、マネジメントの成果のトータルな評価・検討がますます必要となるものと考ええる。

#### 参考文献

- 1) 江田昌佑監修 (1999) スポーツライフ白書 する 観る 視る 読む 支える 話す、ぎょうせい。
- 2) 福本恵美子 (2000) マルチスポーツの実際と可能性に関する研究、日本女子体育大学大学院修士論文。
- 3) 畑 攻, 小野里真弓, 齊藤隆志, 他 (2005) スポーツマネジメントと子どもスポーツネットの企画・運用, 日本体育学会第56回予稿集, p.290.
- 4) 畑, 宇土, 八代 (1984) 運動・スポーツ行動に対する運動者の主体的条件の類型化に関する研究, 筑波大学体育科学系紀要第7巻, p.11-19.
- 5) 林 邦雄 (2005) 図解子ども事典<普及版>, 一藝社。
- 6) 林 園子, 畑 攻, 小野里真弓, 他 (2005) 都会における子どもの体力・運動能力向上の取り組みとスポーツスタイル, 日本体育学会第56回大会予稿集, p.291.
- 7) 林 園子, 畑 攻, 小野里真弓, 他 (2006) 都内小学校と女子体育大の連携とマネジメント, 日本体育学会第57回大会予稿集, p.154.
- 8) 林 園子, 畑 攻, 前田佳奈, 他 (2007) 子どもの基礎基本運動の習熟と生活習慣・運動習慣・意欲に関する研究, 日本体育学会第58回大会予稿集, p.242.
- 9) 久野 歩 (2006) 学校運動部活動の在り方に関する一考察 - マルチスポーツの概念からのアプローチ -, 東京学芸大学大学院修士論文。
- 10) 前田佳奈, 畑 攻, 池田延行, 他 (2004) 中学生・高校生の諸特性とマルチスポーツ, 日本体育学会第55回大会号, p.377.
- 11) 前田佳奈, 畑 攻, 小野里真弓, 他 (2005) 子どものスポーツスタイルと保護者の期待と可能性, 日本体育学会第56回大会予稿集, p.290.
- 12) 前田佳奈 (2006) 子どものマルチスポーツと学校・家庭・社会, 日本女子体育大学大学院修士論文。
- 13) 前田佳奈, 畑 攻, 小野里真弓 (2006) 子どもスポーツの学校, 家庭および社会との連携について, 日本体育・スポーツ経営学会第29回大会号, p.37.
- 14) 前田佳奈, 畑 攻, 小野里真弓, 他 (2006) 子どもの体力向上実践事業の取り組みとマネジメント, 日本体育学会第57回大会予稿集, p.154.
- 15) Maeda, K., Hata, O., Onozato, M., et al. (2006) A Study on Management for a Children's Attitude, Behavior and Physical Strength Improvement in an Elementary School., Asian Association for Sport Management 2006
- 16) 前田佳奈, 畑 攻, 池田延行, 他 (2007) 小学校における都市型連携システムとマネジメント, 日本女子体育大学紀要第37巻, p.75-87.

- 17) 前田佳奈, 畑 攻, 成瀬美紀, 他 (2007) 子どもの体力向上実践事業の成果とマネジメント, 日本体育学会第58回大会予稿集, p.242.
- 18) 正木健雄 (2003) おかしいぞ 子どものからだ, 大月書店.
- 19) 水上雅子, 畑 攻, 小野里真弓, 他 (2005) 子どもの体力・運動能力向上と都市型連携システム, 日本体育学会第56回大会予稿集, p.291.
- 20) 水上雅子, 畑 攻, 前田佳奈, 他 (2007) 親の運動者行動及び運動生活に関する研究, 日本体育学会第58回大会予稿集, p.242.
- 21) 文部科学省 (2002) 子どもの体力向上のための総合的な方策について (答申), 中央教育審議会.
- 22) 文部科学省 (2004) 平成15年度体力・運動能力調査報告書
- 23) 文部科学省 (2005) 平成16年度体力・運動能力調査報告書
- 24) 文部科学省, 東京都教育委員会, 世田谷区教育委員会, 目黒区教育委員会 (2006) みんなで考えよう! 「子どもの体力向上」タウンミーティング イン 東京
- 25) 文部科学省 (2007) 第5回子どもの体力向上実践事業全国連絡会議, 会議資料
- 26) 文部省 (1995) 小学生のスポーツ活動に関する調査研究報告書
- 27) 武藤芳照 (1989) 子どものスポーツ, 財団法人東京大学出版会.
- 28) 日本学校保健会 (2002) 平成12年度児童生徒の健康状態サーベイランス事業報告書
- 29) 佐伯聰夫, 畑 攻, 仲澤 眞 (1998) 地域におけるマルチスポーツクラブの研究, 日本スポーツ産業学会平成9年度プロジェクト研究報告書, p. 3-33.
- 30) 佐藤良男, 畑 攻, 齊藤隆志 (2004) 指導者のための体育・スポーツ行政, ぎょうせい p.14-37.
- 31) 四国スポーツ研究会編 (1992) 子どものスポーツ, その光と影 -生涯スポーツに向けて-, 不昧堂出版.
- 32) 宇土正彦 (1976) 体育管理学入門, 大修館書店, p.51-63.

(平成19年9月13日受付)  
(平成19年12月4日受理)

